

マラルメの辞書学

——『英単語』第一巻「一覧表」の解説——

立花 史

かつて誰も、この語の詩的な意味における
構成^{コンポジション}として、辞典を考えたことはなかった。
ボードレール 「想像力による統治」

はじめに

いささか自明の事柄から始めよう。文学の専門研究^{モノグラフィ}は、特定の作家に特化した研究であり、往々にして、文学と無関係に見える作品や事実までも綿密に拾い上げ、歴史的な位置づけをおこなう。他方で、理論や思想は、ときに、われわれが抱いてきた暗黙の前提を問い直し、文学作品に対する新たな態度を開示する。さて、マラルメ¹⁾のように、理論や思想と専門研究との両側から長らく論じられてきた作家の場合、双方の蓄積をもう一度組み直すことで、さらに先へと進めることができる。たとえば、専門研究の最新の成果にさえ潜む前提を洗い直すと同時に、理論や思想を酷使し、作家の文学以外の著作と向き合わせることによって。

マラルメの『英単語』を扱うとき、まさに私はそうせざるをえなかった。一応は非文学作品である同書がとりもつ文学作品との関係を十分に検討するために、というよりむしろ、文学とその周辺領域とに共通の根幹へと、今なお「詩」の枠には収まらない作品の発見を可能にする根幹へと立ち戻るために。そしてこの根幹にかかわるのが、今日まで見過ごされてきた「辞書学」の主題なのである。

本稿の手順をあらかじめ述べておく。まず第1節では、『英単語』という

1) テキストはすべて以下の版を用いる。MALLARMÉ (Stéphane), *Œuvres complètes*, I, éd. Bertrand Marchal, Gallimard, 1998; *Œuvres complètes*, II, éd. Bertrand Marchal, Gallimard, 2003. 以下、第二巻からの引用はページ番号のみで示すことにする。

著作全体における「辞書学」の含意を確認し、第2節では『英単語』の一部である「一覧表」を、ある種の辞典として読む必要があることを明らかにする。そして第3節では、ジャック・ミシヨンの先行研究を確認して、その可能性と限界を指摘し、最後に第4節では、「一覧表」が辞典であるばかりでなく、文学とも見まがう一つの作品であることを提示したい。

第1節 「辞書学」としての『英単語』

『英単語』は、1877年末の刊行物である。1860年代を初期マラルメとし、『さかしま』や『呪われた詩人たち』による紹介で再び脚光をあびた80年代半ば以降を後期マラルメとするなら、70年代という中期は、発表作品が比較的少なく、むしろマラルメにおいて教育やジャーナリズムの執筆活動が活発な時期であった。

『英単語』という著作について、研究者の常識の部類に属する事実が二点ある。ひとつは、それが、当時の比較文献学に依拠した語学教材であること。もうひとつは、文献学のうち、文法ではなく、語彙に特化した著作だということである。しかしながら、マラルメ自身が、『英単語』のなかで、語彙研究一般を、はっきりと、大文字で、Lexicographieと位置づけていること²⁾は、従来ほとんど注目されてこなかった。邦訳の『マラルメ全集』では、このLexicographieが「語彙論」と訳されている。もしかすると訳者の高橋康也は、『英単語』という著作には、辞典の類と直接の接点が見当たらないと考え、それゆえ、辞書編纂・辞書学という訳語ではなく、語彙論という訳語を選んだのかもしれない。しかし、『英単語』の出版元であるトリュシー社が出したカタログの紹介文——マラルメ自身が書いたとされる——では、『英単語』が「〈辞典の鍵〉」³⁾と形容されている。それだけではない。『英単語』の序論の冒頭に近い箇所で、きわめて印象的な仕方で、辞

2) 「[...] 文の中で意味によって決定される文字の変化、それが〈文法〉または言語の形式研究となる。残りは、単独で取り出された不動の語そのものの実質研究、それが〈辞書学〉である。今からお読みいただく文献学は、他のすべての文献学と同じく、のちには、〈規則〉と〈語彙〉というこれら二物を包摂する予定である。二つの巻が、この二重の問いにおけるおのれの持分をそれぞれ扱うこととなるが、現にここにある一方が、〈語〉に関する巻である」(p. 951)。

3) 「本書は、現代科学の観点から英語を研究したフランス初のものである。[...] この〈辞典の鍵〉のおかげで、日ごろ言語学習が記憶に強いるかくもつらい労苦は、知性にとっての遊びとなる」(p. 1793)。

典について言及されている。

辞典をまるまる一冊渡される、それは膨大で恐るべきものだ。辞典を所有すること〔辞典に精通すること〕は、大冒険であり、読書に助けを借りたり、文法の初歩を一通り学び終えたりが伴う。[...] 単語たちは、なんと多くの（原初的でない）ニュアンスを意味していることか。小辞典〔lexique〕の欄の中に配列されるこのような語の乱雑な集まりは、そこに恣意的に、そして何か悪い偶然によって、呼び集められるのだろうか。とんでもない。各々の語は、諸地方または諸世紀を通じて、遠くから、自分の正確な位置に着く、この語は孤立させられ、あの語はある一群に混ぜられるといった具合に。そのとき、白紙ページの数々に語彙集を表象する——と推測される——われわれの精神にとって、それぞれの語たちの過去の成り立ちについて一つの新たな表象を与える器用な手つきに知恵をつけられて、語たちが、お互いに溶け合ったり争ったり、退け合ったり惹きつけ合ったりして、かつての有様のように立ち現れようものなら、それは魔術さながらであろう。あなた自身も、諸々の語が今日作り上げている言語そのものと一体となるであろう [...]。(p. 948)

まずはアルファベット順の辞典をイメージしよう。アルファベット順は、一つの単語をピンポイントで調べるには大変便利なのだが、そのかわり単語と単語の類義関係や親族関係がわかりづらく、語彙が無造作に並んでいるような印象を与える。しかし、実際には、おのおのの単語は、それぞれ歴史の厚みを担って緊密に結びついている。それは、当の辞典編纂者たちがもっともよく心得ている。そういうわけで、辞典編纂者たちの語彙文献学に立ち戻って、辞典を読み直してみればどうか。そのとき、おのおのの単語が経由してきたドラマが、「魔術さながら」に、ありありとよみがえるはずだ。マラルメの立場はおおよそこうしたものである。つまり、彼が語彙研究を「辞書学」と呼ぶのは、語彙研究が、まずもって辞典編纂者にとって必要な作業だと考えているからである⁴⁾。また『英単語』が「〈辞典の

4) 「[...] わが国のアカデミー、ついでリトレのような巨匠たちや英国の巨匠レイサムが、後の時代になって自らの一般辞典を作る際には、まさに必ず、すでに仕上がった言語の過去の永きにわたる冒険を喚起する」(p. 949)。

鍵」と呼ばれる理由もここにある。英単語を文献学的に学習することは、辞典という「結果」よりも、辞典編纂という「過程」を追体験すること、そして、各自が“心の中の辞典”を書きあげることがを意味する。このように、『英単語』は、アルファベット順の辞典を、語彙の無造作な寄せ集めではなく、語彙の緊密なネットワークとして捉えなおす試みである⁵⁾。それでは、辞書学という見地を踏まえて、次に、「一覧表」の議論に移ろう。

第2節 「一覧表」とは？

そもそも「一覧表」とは何か。それは、『英単語』第一巻第一章に所収の、相対的に自律した英単語のリストを指す。英語の語彙の中から、アングロ＝サクソン語由来のものだけを抜き出し、そのなかでも、単純語と呼ばれる、接頭辞も接尾辞も持たない簡潔な単語を選び出す。「一覧表」とは、英語のうち、アングロ＝サクソン語由来の単純語のリストである。そしてこのリストにおいて、それぞれの単語にはフランス語訳が付され、単語のイニシャルのアルファベットごとに分類されている。これは、すでに、ひとつの小辞典の体をなしていると言える。マラルメ自身、一覧表の「従う順序は、〈辞典〉の順序とは別のものである」(p. 969)と断っている。つまり、特殊な順序に従った辞典だという含意がそこに読み取れる。したがって一覧表は、まずもって、辞書学的実践として読む必要がある。

一覧表の構成はきわめてシンプルである。おおよそ三つのパーツに分解

5) もっとも、この引用箇所については、先行研究でも言及がないわけではない。たとえばマルシャルは、「辞典を作り直すこと [...] はアルファベットの根源的な有縁性を、そのうわべ上の恣意性の奥に見つけ出すことによって、アルファベット分類の十全な権利を裏付けることである」と要約しており、それに続くリュプリ&トレル＝カイユトーやラロッシュもその点に軽く触れている。しかし四者の共通点は、辞典の「有縁性」を安易に頭韻に求めて、文学の問題に還元してしまっていることにある（わざわざマラルメが、『英単語』の中で「ここでは、詩人や作家たちの頭韻までは行かないこと」(p. 942)と断っているにもかかわらず）。つまり、この四者は、『英単語』が「辞書学」であるというマラルメの主張を、真剣に考慮していないのである。以下を参照のこと。MARCHAL (Bertrand), *La Religion de Mallarmé*, Paris, José Corti, 1988, p. 458; RUPLI (M.) & THOREL-CAILLETEAU (S.), *Mallarmé. La grammaire et le grimoire*, Genève, Librairie Droz, 2005, p. 208; LAROCHE (Hugues), « Poésie de la linguistique : la tentation du dictionnaire », *SEMEN*, 24-2007. <<http://semen.revues.org/document5933.html>> (janvier 2012), paragraphes 14, 34 et 35.

することができる。それが「語家族」、「孤立語」、「覚書」である。

まず、「語家族」から見てゆく。マラルメによると、語源の近い単純語のうち、音・文字と意味との両面で密接な関係があると判断できるものだけを一つのグループにまとめてゆく。まとめ方に個人差が出てよい。このグループが「語家族」である。そして、グループに入らず孤立する単語が「孤立語」となる。さて、語家族においてもっとも中心的な意味をもつ単語が「基準語」と呼ばれ、その他の単語は「関連語」と呼ばれる。この基準語によって、語家族がどのイニシャルに帰属するかが決定される。たとえば、to flyが基準語であれば、イニシャルFのもとに置かれる。孤立語の場合は当然、その語のイニシャルのもとに置かれる。このようにして、各イニシャルのもとに、複数の語家族と複数の孤立語が並ぶ。

次に「覚書」について見てゆこう。覚書は、各イニシャルのもとに置かれたメモで、語家族や孤立語の情報を書き留めている。Fの覚書を引用しよう。

Fは、BやPといった他の唇音よりも語頭にくる頻度は少ないが、非常に独特な価値をもった文字である。それはおのずから、強くしっかりと包み抱くことを示し、母音や二重母音の前に来る。LやRといった通常の流れ音とくっつき、Lとともに、飛翔する動作あるいは空間を打つ動作を表わす大半の語を形成するが、それがレトリックによって、光かがやく現象の領域に移されることさえある。他方で、古典語においてと同様に、流れる動作をも表わす。Rを伴って、戦いもしくは隔たりを表わしたり、お互いにつながりのない複数の意味を表わしたりもする。(p. 984)

「覚書」の主な内容は、イニシャルの意味づけである。同じイニシャルをもつ語家族や孤立語を見回したときに、そのイニシャルが与える印象を記述したものである。Fで言えば、「強くしっかりと包み抱くこと」「飛翔する動作あるいは空間を打つ動作」などがそれに当たる。ただし読めば明らかのように、覚書の内容は、(1) イニシャルの意味、に尽きるものではない。そのほかにも、(2) そのイニシャルをもつ単語の（他のイニシャルと比べた）多寡、(3) そのイニシャルの次に現れやすい音ないし文字（およびその意味）、(4) そのイニシャルと別のイニシャルとの意味の共通点・相違点、

などの情報を含む。

さて、以上が、一覧表の内容である。ここで一点だけ指摘しておく。一覧表には、大きく分けて、二つの水準がある。ひとつは、「語家族」や「孤立語」の水準である。これらは、語源を基礎とした分類なので一応は文献学的と言える。もうひとつは、「イニシャルの意味づけ」の水準である。これは、語源的に関係のない語家族同士、孤立語同士を、アナロジーで結びつけている。その意味で、本質的に、非文献学的、むしろアナロジックと言える。このような一覧表をどう分析すればいいのか、次に見てゆこう。

第3節 文献学と象徴学

一覧表に、明快な分析をいち早くくわえたのは、ジャック・ミションである。彼は、トドロフの象徴概念を援用している⁶⁾。ひとまずそれを確認しておこう。

トドロフは、象徴の主要な例を二つあげている。それは、転義とダイアグラムである。第一に、転義の場合だが、これは言語にかぎらない。彼は、提喩を包含関係、隠喩を共有関係、換喩を隣接関係として一般化し、二項のあいだにこうした関係が成立するときに、象徴を見てとる。たとえば、十字架でキリスト教を表現する場合、これは提喩による象徴である。第二に、ダイアグラムとは、表現内容と表現形式とのあいだの比例関係である。たとえば、時間的ないし論理的に先行するものを、文中で先に挙げる場合、あるいは量の多さを長い言葉で表現する場合、さらには対比的な内容を並行的な言葉で表現する場合 (*père* と *mère*、*ami* と *ennemi*)、そこでは内容が形式によって象徴されていると言える。

このように、ある項が、別の項を、近接や比例の関係によって表現するとき、そのある項を「象徴」と呼び、特定の二項にこのような関係づけ(有縁化)をおこなうことが「象徴化」に含まれる。象徴は言語記号を用いて作ることも可能である。しかし言語記号の意味関係は、有縁化とは別の水準で成立していることからわかるとおり、象徴関係は意味関係とはまったく別物であり、象徴は記号と異なる⁷⁾。

6) TODOROF (Tzvetan), « Introduction à la symbolique », *Poétique*, 11(1972), pp. 273-308.

7) ただし、トドロフは、記号と象徴の根本的な相違を、有縁性に求めてはいな

このような象徴概念を用いて、ミションは一覧表を分析する。

第一に、象徴化は、語家族の水準に見出せる。語家族 (to heave/heaven/heavy) を見てみよう⁸⁾。heaven と heavy は一見あまり関係があるように見えないが、基準語 to heave (持ち上げる) という動詞を介することによって、高く持ち上げられた場所としての天国と、持ち上げるときの重みとが、換喩の隣接関係によって結びつけられる。ここに転義としての象徴化を見てとることができる。またそのことによって、HEAV-という語幹に、「持ち上げる」の意味を見てとり、そこから音・文字の比例関係で、heaven や heavy を再解釈することができる。ここにダイアグラムとしての象徴化が認められる。

第二に、同様の手続きによって、象徴化は、「イニシャルの意味づけ」の水準にも見出せる。まず、H をイニシャルにもつ単語の中には、さきほどあげた to heave、heaven、heavy のほかに、high や to hang があり、これらの意味のあいだに転義としての象徴化をほどこすことが可能である。またイニシャル H には「非常に高く掲げられるもの」という意味づけがなされているので、それとの比例関係で、high や hang のような別の語家族の単語までも位置づけ直すことができる。こうしてダイアグラムとしての象徴化が導かれる。

おおまかにいって、以上が、ミションの分析である。このような転義とダイアグラムによる象徴化を、「音と意味との二重の還元」⁹⁾ と彼は呼ぶ。私は、ミションの基本方針に異論はない。むしろ問題はその先にある。彼は、トドロフの象徴学を詩学的一种とみなす。そして記号と象徴は異質であるという事実からさらに一步踏み出して、言語記号を取り扱う文献学と、文学を取り扱う象徴学とは相容れないと考える。その結果、一覧表は、マラルメが、文献学の用語を用いながら文献学に抗う試み、と見なされてし

い (というのも、有縁化されたものは多かれ少なかれ象徴の部類に入るが、すべての象徴が有縁化されているわけでもないからである)。むしろ彼は、この相違を、指示対象をもつかどうか、認知的価値をもつかどうか、などに求めている (Todorov, *op. cit.*, pp. 275-286)。

8) 次の語家族である (p. 1005)。一覧表では、左に基準語、右に関連語が並ぶ。

to heave, élever et soulever

heavy, lourd.

heaven, ciel, ce qui est élevé.

9) MICHON (Jacques), *Mallarmé et Les Mots anglais*, Montréal, PUM, 1978, p. 125.

まう¹⁰⁾。

ミシヨンの致命的な誤りは、トドロフの象徴学を詩学の一種と考えることである。これはトドロフの本意ではない。たしかにトドロフは、象徴学を詩学の発展形と考えている。しかしそれは、文学性の探求において見出されてきた事象が、実は、文学固有のものではないことが判明したがゆえに、詩学が、文学以外のあらゆるテキスト、あらゆる言語事象、さらにはあらゆる象徴性を対象とする学問領域へと再編成されざるをえなくなかった、ということである。彼が象徴学を提唱するのはそのためである¹¹⁾。したがって、ミシヨンのように、象徴学を詩学の一種と捉えて文献学と対置するのは正確ではない。トドロフからすれば、象徴は、文学性の基礎単位であり、象徴学とは、文学とそれ以外の言語活動、詩学とその他の言語研究とを架橋する、より包括的な学問領域なのである¹²⁾。

したがって、象徴学は文献学と両立可能である。このことを確認するために、もう一度、さきほどの語家族を見てみよう。われわれは、三つの英単語 *to heave*、*heaven*、*heavy* のあいだに象徴関係を認めた。この語家族は、詩人の勝手な関係づけではない。アングロ＝サクソン語 *hefan* に由来する語幹 *HEAV-* が、実際に「持ち上げる」という意味を持っていたことによるものである¹³⁾。したがって、この語家族は象徴学的であると同時に文献学的

10) 「いかにしてマラルメが、言語学からそのシニフィアンを借りつつ、同時にこの言説に抗ってみずからを書き込んでいるか、そして、いかにして彼が、特定の言語から、言語活動の一般詩学を練り上げているかを明らかにしつつ、われわれは、『英単語』において、象徴というこの第三世界を例証するつもりである」(Michon, *op. cit.*, p. 17)。

11) 「[...] 詩学に結晶化した類の研究を、今日、文学だけにとっておくいかなる理由も存在しない。文学テキストのみならず、あらゆるテキストを、言語作品のみならず、あらゆる象徴性を、「そのものとして」知る必要がある。[...] それ[私の意図]は、文学事象にかかわるが、文学に属さない他の事象にもかかわる。もっとはっきり言えば、私は、ある問題系を扱うつもりであり、この問題系の研究に対してのみ、象徴学という総称を私は用いる」(Todorov, *op. cit.*, p. 275)。

12) トドロフの「象徴学」に対する今日の評価については次を参照のこと。Cf. DUCROT (Oswald), *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, Seuil, 1995, pp. 263-264. さしあたり本稿では、転義やダイアグラムといった象徴関係の様態が、文学とそれ以外の言語活動の双方に見出せることを押さえておけば問題はないと思われる。

13) マラルメが『英単語』執筆の際に用いたとされる語源辞典では、以下のように記されている。**to heave**: [A.S. *hefan*, Ger. *heben*, Goth. *hafjan*, to lift.]; **heavy**:

でもある。言い換えるならば、単語と単語の関係を、文献学的に関係づけることもまた、象徴化の一種たりうるということである。この見地から、文献学的辞書学を捉えなおしてみよう。

第4節 四つの象徴化

私は、第2節で、一覧表を辞典として読む必要があると述べた。ここで辞典の一特性に注目してみよう。辞典とは何かと言えば、それは、一定の数の語彙を総体的に関係づけたテキストである。アルファベット順の辞典を例に具体的に進めよう。そこでは、一方で、単語たちが、イニシャルごとに集められている。出だしにSがつく単語はすべてSの項に収められ、語群を形成する。これが縦の関係である。他方で、イニシャルごとの語群同士が、今度は、アルファベット順というかたちで配置される。イニシャルSの語群は、Rの語群のうしろに、また、Tの語群の前に置かれる。これが横の関係である¹⁴⁾。このように、縦の関係と横の関係によって、語彙の総体が関係づけられていること、これが辞典の一特性と言える。ここに微弱な象徴化を見てとることも可能である。

いずれにせよ、一覧表を辞典として読むということは、一覧表のなかに、単語たちとそのイニシャルとの一対一対応の関係、つまり縦の関係を見るだけでなく、各イニシャルの語群同士の関係、つまり横の関係もまた見ていく必要があるということの意味する。

さて、実を言えば、一覧表の語彙分類は、単語のイニシャルのアルファベットごとになされているが、これはアルファベット順ではない。次のとおりである。

A, E, I/Y, O, U.

B, W, V, P, F, G, J, C, K, Q, S, D, T, H, L, R, M, N.

[A.S. *hefig—hefan*; old Ger. *hewig, hebig*.]; **heaven**: [A.S. *heofon—hefan*, to lift.]. Cf. DONALD (J.), *Chambers' Etymological Dictionary of the English Language*, London, W. & R. Chambers, 1874.

| | | | | | |
|-------------|--------------------|---|--------------------|---|--------------------|
| 14) [横の関係→] | イニシャル R | → | イニシャル S | → | イニシャル T |
| [縦の関係↓] | ↓ | | ↓ | | ↓ |
| | 語群 (R1, R2, R3...) | | 語群 (S1, S2, S3...) | | 語群 (T1, T2, T3...) |

この点にこそ、一覧表に独特の「横の関係」がある。「一覧表への注記」を見てみよう。

従う順序は〈辞典〉の順序とは異なる。そこに、唇音・喉音・歯音・流音・スー音・帯気音への分類を認めることができようが、これは、科学的装置の借り物によるものではなくて、おそらくは全意味と文字との諸関係によるものである。この諸関係は、もし実在するなら、語において、しかじかの発声器官を特別に使用することにのみよるものである。(p. 969)

マラルメの構想はシンプルである。まず、ある音・文字とそれがもつ意味全体とのあいだに一定の関係性があると仮定する。さて、音は発声器官の使用方法によって音声学的に分類できる。ゆえに、音・文字と意味全体との関係も、音声学的分類に従う。一見、トリヴィアルな指摘に見えるが、この指摘は、なぜマラルメが、発音の類似した文字を寄せ集めているのかという「横の関係」の説明になっている。イニシャル同士には、しばしば音声学的な関係がある。たとえば、Bは有声唇音、Fは無声唇音、といった具合に。さて、イニシャルをその全意味との関係で考えるなら、音の似たイニシャルは、意味も似ているはずである。したがって、一覧表のイニシャルの順序を、音声学的に分類すれば、語群同士に対して、より緊密な関係づけ（有縁化）がほどこせるのではないか。マラルメの構想は、おおよそ、こうしたものである¹⁵⁾。これに沿って、以下では二つの点を指摘しておきたい。

(1) イニシャル間の音声学的関係

イニシャル同士の音の関係は少し考えてみる必要がある。分類は順序ではないからである。音声学的にイニシャルを分類したとしても、そこからイニシャルの順序は出てこない。なお、マラルメは、母音イニシャルには

15) 一覧表のイニシャルの順序は、何箇所かで言及されるが、いずれも実際の一覧表のイニシャルの順序とは異なっている。ただし、『英単語』での登場順に、「プログラム」、「一覧表への注記」、「一覧表」を見てゆくと、はっきりとした傾向性を認めることができる。詳しくは別稿に譲るが、そこには、アルファベット順から音声学的順へ、という漸進的な移行が見られる。

特定の意味があるとは考えなかった¹⁶⁾、イニシャルとその意味の関係は問われていない。子音イニシャルの順序は次のようになっている。

第一に、イニシャルの順序を決めるのは、音声学にかかわる基準である。まずはグリムの法則が述べられる際の順序が最優先である。すなわち、唇音、喉音、歯音の順番であり、さらに有声から無声へという順番である。次に、マラルメは、Wの覚書の中で、歴史的に見て、Wが規則的にGやVを翻訳していると述べているので、BとPのあいだにWとVが入る。そして、Gは喉音（ガ行）と同時に後部歯茎音（ジャ行）を表現するので、Gのつぎに、後部歯茎音として、有声のJ、無声のC（チャ行）、その近くにS（シャ行）が来る。また、歯音DとTのあとに、歯茎音を表すイニシャルLとRが来る。

第二に、イニシャルの順序を決める基準は、多数決である。マラルメは覚書やその他で、数の多さを重視している¹⁷⁾ので、単語の数の多さが順序を決めるようである。その結果、 $W > V$ 、 $P > F$ 、 $C > K > Q$ 、 $L > R$ 、 $M > N$ となることから、これらのイニシャルの順序が決定される。また、一覧表の中の語数を見てゆくと、 $T > H > LRMN$ であることから、Hの位置も正当化される。

(2) イニシャル間の意味論的關係

最後に、イニシャルの意味同士の関係を見ておく。イニシャルの意味同士の関係は、一部の例外を除き、大半の場合は明記されていない。しかし、覚書の記述を見ると、大抵の場合、類似音同士の意味の対応関係は明らかである。

B : 「[...] 出産、豊穰さ、幅、膨らみ、湾曲 [...] の意味をもたらすためだ」

16) アングロ＝サクソン語由来の単純語のうち、母音から始まるものが少ないので、はっきりとした意味は見出せないとマラルメは考える (pp. 970-973)。ちなみに母音イニシャルは、広い音から狭い音、唇を引く音から突き出す音への順となる。

17) 一例だけ挙げておく。「孤立語と呼ばれる語たちは、関連語たちほど関心を引かないように見える。当然である。それでも確認すべきは、〈言語〉のうちでもっとも重要なもののいくつかは数の中にあること [...] である」(p. 968)。

P : 「この文字 [...] が含む、積み重ね、獲得された豊かさ、停滞というはっきりとした意味」

G : 「欲望は、Lによって満たされたかのように、この流音を伴うと、喜び、光などを表現し、また滑走の観念から、植物の生長と他のあらゆる様態による増長の観念にも移行する。最後にRのもとでは、Lとともに欲望された対象の把握や、それをつぶしたり挽いたりする要求があるようだ」

C : 「単語たちは [...] このイニシャル文字から、Lの付加のおかげで、締め付けたり、裂いたり、這い上がったり、といった鋭敏な動作の意味を、Rとともに、破碎やひび割れの意味を、受け取る」

D : 「それ [D] は、[...] 停滞、道徳的な重苦しさ、暗さを表現する」

T : 「この文字は、とりわけ、停止を表す」

L : 「この文字は、飛び跳ねることのような意味において、いくばくかの自発性を見出し、聞くこと、愛することの意味とともに、それがもつ憧れの力そのものを見出す」

R : 「上昇や、誘拐のような代償を払ってでも達成された目的、充実、[...] これが、言語学者に強く印象づける主な意味である」

M : 「Mは [...] 尺度、義務、数、出会い、融合、中間項を表現する」

N : 「時間または空間での近接とともに、Lの場合と同様、単純な状態である」

J : 「Jは [...] 生き生きとした直接的な何らかの行動を表現する傾向を示す」

CH : 「CHは、しばしば激しい努力を含意し、そこから厳しさの印象を残す」

SH : 「SHはまた、はっきりと、遠くへのほとぼしりを、だがしばしば、影、恥、避難を、それから反対に、提示する行動を示す」

上掲のように、「唇音」(B-P)、「喉音」(G-C)、「歯音」(D-T)、「流音」

(L-R)、「鼻音」(M-N)のあいだだけでなく、マラルメが明示的に主題化していないかに見えた後部歯茎音(J-CH-SH)のあいだにも、類似した意味づけが見られる。

こうして、イニシャルよりさらに高次のイニシャル間という水準でも、意味と音・文字との関係づけによって、転義とダイアグラムを認めることができる。

ここまでの分析の結果、一覧表には、少なくとも四つの象徴化が見出せることがわかった。(1) 語同士の関係の象徴化。これが、語家族に当たる。(2) 語家族同士の関係の象徴化。これが、イニシャルの意味づけに当たる。(3) イニシャル同士の関係の音声学的象徴化。これが、イニシャルの序列に当たる。(4) イニシャル同士の関係の意味論的象徴化。これが、イニシャル同士の意味づけの類似性に当たる。以上が、辞典としての一覧表の構造である。

まとめ

私の知るかぎり、これまでの研究には共通の姿勢が見られる。それは、『英単語』のなかに、マラルメの詩論・詩作品との接点をじかに読み取ろうとする姿勢である。こうした姿勢には、二つの問題点がある。ひとつは理論上の問題点で、文献学的試みと詩的試みとが、あたかも原理的に相容れないかのように振る舞う文学理解を潜ませている。もうひとつは読解上の問題点であり、一覧表の全体、さらに『英単語』の全体を捉える包括的視座の欠如である。そこで私は、理論上の問題点に対処すべく、トドロフに立ち戻って象徴学の正当な拡張をおこない、文献学と象徴学との両立可能性を導出した。この立場は、先行研究の特権的な分析対象であったアナロジーや転義による関係づけのみならず、語源や音の文献学的な関係づけも含めて、「象徴化」という同じ一つの枠組みで扱うことを可能にした。また『英単語』の読み直しを通じて「辞書学」という包括的視座を発見したことで、読解上の問題点に対処することも可能となった。こうして本稿では、一覧表が、四つの関係づけからなる特殊な小辞典であると同時に、記号論的分析に耐えうる構成コンポジションをそなえた一つの作品でもあることを提示したつもりである。この意味で一覧表は、文学に見立てたり文学に還元したりするよりも、むしろ原理的に文学とその周辺領域との双方にまたがるものとして理解しておくのが適切であろう。

さて、一覧表は、伝統的な韻文とは異質な象徴化の試みである。それゆえ、後期のマラルメが韻文を拡張して、新たな詩句のあり方を模索するとき、一覧表とのあいだに、象徴化の観点からさまざまな接点が生じてゆく。主なものを挙げておこう。(1) 偶然性の排除。一見、恣意的に見える個々の語の形態や配置を、全体の「構造」によって払拭しようとする。ここに、一覧表と「純粹著作」(p. 211)との接点がある。また本稿第1節の引用における言語との一体化には、語り手の消滅や非個人性の兆しも見られる。(2) 「拡張されさえした統語法」(p. 277)。一覧表には、大きなフォントでイニシャルが、小さなフォントで英単語が印字されており、余白を置いて列挙される語家族は最大の場合、見開き2ページ近くにおよぶ¹⁸⁾。『英単語』執筆の時点での詩人の心中は定かではないが、余白とフォントによる観念の提示という点で、『ディヴァガシオン』における「文字の全面的な拡張」(p. 226)や『賽の一振り』における「プリズムによる〈観念〉のさまざまな下位分割」(O.C.I, p. 391)に通じるものがある。(3) テクストの可動性。一覧表は、不磨の完成体ではない。原則に基づき、各人が自分の感覚で語家族を自由に組み替えてゆくことが想定されている。マラルメ自身、読者に微調整を勧めている¹⁹⁾。これは、英語学習を「知性にとっての遊び」にするための『英単語』の工夫の一つである。ここには、可動性の規則や目的が異なるものの、〈書物〉の題名で草稿がまとめられた朗読会のモデルとの接点を見てとることができよう。

従来の研究が、一覧表を“記号の有縁化”と見なしていたとすれば、私の研究は、一覧表を“辞典の有縁化”と捉えなおす²⁰⁾。これは、コーパス

18) MALLARMÉ (Stéphane), *Les Mots anglais*, Paris, Truchy, 1878, pp. 82-83.

19) 「あとで読者は、この分類を、好きなようにいじることができよう。ある語を〈孤立語〉から〈語家族〉へ移したり、ある語が居候でしかないとなればそうした遠戚から、〈語家族〉の一つを解放してやったり、粗を整えて遺漏を埋めたり、と」(p. 966)。

20) ただし、細部の粗雑さや初歩的な誤謬を別にしても、一覧表の「有縁化」には原理的な問題点がある。第一に、恣意性の排除の失敗である。語同士の恣意性を語家族の水準で関係づけようとしても語家族同士の順序に恣意性が入り込む。同様に、語家族同士の恣意性をイニシャルの水準で縮減しようとしても意味づけの順序に恣意性が入り込む。またイニシャルの音声学的分類自体、発音と綴りの混同を避けられない。第二に、アナロジーの濫用である。アナロジーは、物事を結びつけすぎること、混同させることを忘れてはならない。単語は、意味や形の点で似ていればそれだけまぎらわしく、記憶のコストが増大する。こうした「アナロジーの魔」を祓う手立ても、『英単語』には記されていない。

に対する根強い序列化（文学／非文学、主要／周縁）を疑義に付して詩人の全体像の再構築を促すのみならず、彼を、フランス辞書学の伝統と対話させる²¹⁾と同時に現代の認知心理学や教育心理学とも交差する地点に位置づける²²⁾一助となるはずである。

（早稲田大学非常勤講師）

21) 辞書学の歴史と一覧表の関係については、いずれ雑誌論文にて発表予定だが、さしあたりは教育の観点から論じた拙稿をご参照いただきたい。立花史『ステファヌ・マラルメのポエダゴジー』、早稲田大学大学院文学研究科フランス語フランス文学専攻、博士課程学位論文、2012、第1章および第5章。

22) マラルメが『英単語』で構想した“心の中の辞典”は、おそらく今日では、認知心理学における「心内辞書」(mental lexicon)の研究に属する。心内辞書とは、「人間の言語活動を情報処理活動の一環と見なした際にその言語処理情報活動を通じて、脳内に蓄積・表現されている語彙情報の集合体」(松本裕修 他『単語と辞書』、東京、岩波書店、2004、p. 94)である。心内辞書の研究はもともと連合・連想と記憶の研究に由来する。その歴史は、古くはアリストテレスに遡り、のちにイギリス経験論において連合主義として再評価される。19世紀末には連想・連合の臨床的研究が開始され、20世紀前半の行動主義心理学を経由して、やがて認知心理学へと再編成される。現在では、語彙情報の構築過程を規定する時間要因などを変数として、言語環境の個人差を組み込んだ心内辞書のモデルが模索されている(詳細は前掲書第3章を参照)。こうした成果は、今後の教育心理学や外国語教授法にも反映されてゆくものと考えられる。詩人マラルメが、言語の習得・教育の今日的な議論と接点を持ちうるということは、文学史上特筆すべき事柄であろう。

La lexicographie de Mallarmé

— décodage de la Table du Livre Premier des *Mots anglais* —

Comme on le sait, *Les Mots anglais* sont une publication pédagogique, rédigée du point de vue de la philologie comparée. Mais, chose curieuse, on n'a jamais traité de front le statut que l'auteur a attribué à ce livre: « la Lexicographie ». Notre article a donc pour objet de reconstruire l'entreprise lexicographique de cet opuscle ainsi que d'examiner sa Table énigmatique dans le même cadre.

Mallarmé a vécu à l'époque de la lexicographie philologique (dont Littré était le sommet). Cette dernière nous a permis de comprendre chaque mot dans son épaisseur historique. Le poète s'est émerveillé de ce procédé magique jusqu'à l'appliquer à son propre manuel scolaire. Selon lui, apprendre le vocabulaire consiste à se faire un dictionnaire mental. Ainsi, *Les Mots anglais* constituent la « *Clef du Dictionnaire* ».

Or, notre approche n'exclut pas la symbolique de Todorov qu'on a introduite dans l'analyse de cette œuvre. Au contraire, la symbolique proprement dite vise toutes les sortes de textes (y compris les dictionnaires). Elle nous permet de tenir compte de la Table dans son intégralité selon la même approche, tout en distinguant différentes motivations, philologiques et poétiques. Nous y reconnaissons au moins quatre formes de symbolisation: celle des mots, celle des familles, celles des initiales, de type formel et de type sémantique.

Si notre argument est bien conduit, la Table montre à la fois un petit dictionnaire original et un ouvrage sémiotiquement analysable. Il s'agit, dans ce texte, de la motivation du dictionnaire, plutôt que de celle du signe. Notre étude contribuera à déconstruire les oppositions qu'on suppose inconsciemment chez l'auteur, entre les textes dits principaux et marginaux, littéraires et non littéraires, avant de repenser dans une cohérence neuve toute son œuvre dans son rapport au hasard historique.

Fuhito TACHIBANA
Chargé de cours (non-titulaire)
à l'Université Waseda